

岩手県中央家畜保健衛生所 試験調査レポート

平成21年度

分野:病原診断・細菌

家畜:牛

担当:昆野 勝

黒毛和種繁殖農場におけるヨーネ病の継続発生に関連する疫学的因子

【 目的 】

ヨーネ病は、まん延防止対策として牛の移動自粛が求められ、子牛の販売を主とする肉用繁殖雌牛飼養農場では農場経営に多額の損害を与える。また、清浄化の判断が困難なことから経営計画を不確実なものとし、畜主の心理的な不安を与える。

継続発生事例と単発事例における初動時の疫学情報と病性鑑定について統計学的に解析し、円滑な防疫対策の推進および検査に係わる重要点を確認する。

【 成績の概要 】

平成17年度以降に患畜が摘発された25農場の疫学情報10項目(下表)を、ロジスティック回帰分析法よりに解析し、初発生後1年以内の継続発生に関わる指標を検討した。「摘発牛の臨床症状(下痢)」が、唯一、有意な因子と判定され、発症以外の項目では、同居牛のDNA検出が有意項目であった。

また、肉用牛における発病牛摘発農場の継続発生率は、未発病牛摘発農場の53.2倍と算出され、既報[Kobayashi et al. (2007)]の乳用牛における3.8倍より高値を示した(図)。

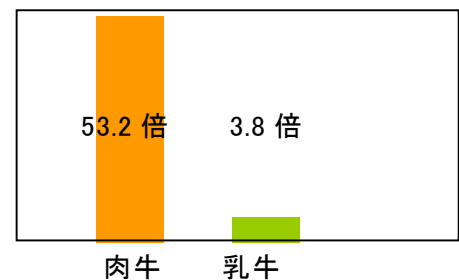
本病は、発症以前に早期摘発することが重要であり、現在行っている定期検査が非常に有用であることが改めて示された。

〔表〕疫学情報項目

①下痢発症による初摘発。(有意)	⑥同居子牛が8頭以上。
②牛舎形態がパドック管理。	⑦同居牛からヨーネ菌DNAを検出。
③棟数が2棟以上。	⑧自主淘汰を実施。
④初摘発牛の糞便に抗酸菌を観察。	⑨初摘発牛に病変。
⑤同居成牛が14頭以上。	⑩初摘発牛からDNAを検出。

〔図〕発病牛摘発農場の継続発生率

(未発病摘発農場の継続発生との比較)



【 成績の活用 】

早期摘発のための検査(発生予察検査)を継続すること。

継続発生の予防と継続発生予察には、発生直後の同居牛全頭のDNA検出が重要。

【 留意事項・備考 】

今後も成績を集積し発生予察等について継続し検討を重ねる必要がある。